

センター つくりん



子どもの風景 第3回

よかったあ

島内 清志(小4)

ぼくは歯医者が苦手で、いつもぬくのをやがっていました。ぼくは歯がぬけるのがおそくて歯ぐきから永久歯が出てきて、ついに歯医者さんに行くことになりました。歯医者さんに、「この二つの歯、ぬいたほうがいいと思います。」と言われぼくは、「いやだあ。」

と言いました。

「じゃあまず、一本だけぬこう。」

と言われて一本だけぬきました。まずいがひじょうにいたかったです。

家に帰ってお母さんに、

「今度、休み明けにぬこう。」

と言われてぼくは、

「オーマイガー。」

と思わず言ってしまった。

冬休みにいこの家へ行っていてしよにゲームをしていました。ぷつちよをくっていたときに、ボキッといって、ぷつちよをティッシュに出して見てみたら歯がついていました。

ぼくは、(もうぬかなくていいぞ、よかったあ。)と思いました。

目次	2021年9月
子どもの風景(第3回)	1
講演 「GIGAスクール構想と子どもが主役の教育」	児美川孝一郎 2
GIGAスクール問題・小学校では 試行錯誤しながらの日々	佐々木久美 14
GIGAスクール問題・中学校では google for education? education for google?	岩沢 一郎 15
授業への招待③ 東日本大震災の学習プラン作り	加藤 正伸 16
子どもと学校 日々、笑顔で	土井 浩孝 18
読者の声(はがき・メールより)	18
子育て、孫育て奮闘記②	阿部 真弓 20
わたしの出会った先生 33 2006年の再会	八反田史彦 21
相談センター報告(第24回) “現場感覚”と“おせっかい”を武器に	瀬成田 実 22
おすすめ映画 『海辺の彼女たち』	伊藤 真弓 23
読書のすすめ(第5回)	春日 辰夫 23
ひと言「書く・読む」文化の変化の先は!?	久保 健 24
子どもの風景 作品について	千葉 早苗 24
センターの動き・編集後記	24

講演

（2021・7・3 フォレスト仙台）

GIGAスクール構想と 子どもが主役の教育

児美川 孝一郎

講演会は、コロナ禍ということもあり、ユーチューブによるライブ配信も行いました。当日の会場参加は31名、ユーチューブ視聴は89名でした。

現在もユーチューブでは録画配信されており、9月7日現在で460回再生になつていきます。ぜひ、そちらもご視聴ください。

はじめに

GIGAスクールの話ですが、結論を最初にいえば、GIGAスクールは、純粋に教育のICT環境を整えるという環境整備ではない。背景には国家戦略としてのSociety5.0があり、その背中を押したのは景気対策です。為政者・支配層はSociety5.0を実現するための教育改革を考えていて、その改革構想は、コロナ禍において2つに分かれました。一層の規制緩和を求めて、改変をどんどん進めようという経産省の『未来の教室』事業に代表される急進派。他方、文科省はいつたん引いて『令和の日本型学校教育』を出してきた。でも文科省はSociety5.0に反対しているわけではなく、学校という形を壊さないで進めようとする。そうした分岐が出てきて、今後はどうなっていくのかというのが現在です。

では私たちはどうすべきか。子どもが主人公の教育、子どもが主人公であることを保障できるような学校をどう創るかということが一番の課題になります。そういう話を7つの柱にして詳しくみていきます。

I GIGAスクールの前提としてのSociety5.0

Society5.0とは何かを確認します。人類は、Society1.0の狩猟社会からSociety2.0の農耕社会へと進み、さらにSociety3.0の工業社会へ、そして次が情報社会のSociety4.0で、現在です。これがさらに高度になってAIとかIoTで全てのがインターネットで繋がり、ロボット工学等がどんどん発展するのがSociety5.0だと言っわけです。

内閣府の宣伝によると、それは〈サイバー空間とフィジカル（現実）空間が融合する。そのことによつて経済発展も可能だ



し社会課題の解決も可能で、その両方が両立する人間中心の社会だ」と嘘をついている。新しい機器やIT系が売れ、サービスも提供するから経済は発展するかもしれない。なかには技術、テクノロジの発展のおかげで課題解決する社会課題もないとは言えない。配達する人が足りないときにドローンなどが個配し、自動運転の車や電車で運転手の問題とかなくなる、無医村では遠隔で医療が受けられるようになる。生産管理とか農業の人手不足などもロボットやテクノロジーが入ってきて、解決するかもしれない。だが社会課題として我々が抱えているものは、そのようなものではないでしょう。貧困と格差や、戦争と平和の問題、そして非正規雇用の増大

などは、Society5.0になってもテクノロジーが解決してくれるわけではない。日本はジェンダーギャップ指数が世界120位と後進国ですが、Society5.0になれば解決するわけがない。

そんな時に経団連は、わざわざ「Society5.0 for SDGs」、こんな打ち出しをするわけです。SDGsは、学校現場でも流行っていて、子どもたちにも課題解決学習として取り組まれている。経団連はSDGsを実現するためには、まさにSociety5.0の社会になって行かなくてはならないという理屈づけにしている。本当はそんなことがなくてもSDGsへの取り組みはあり得ると思うのですが、経団

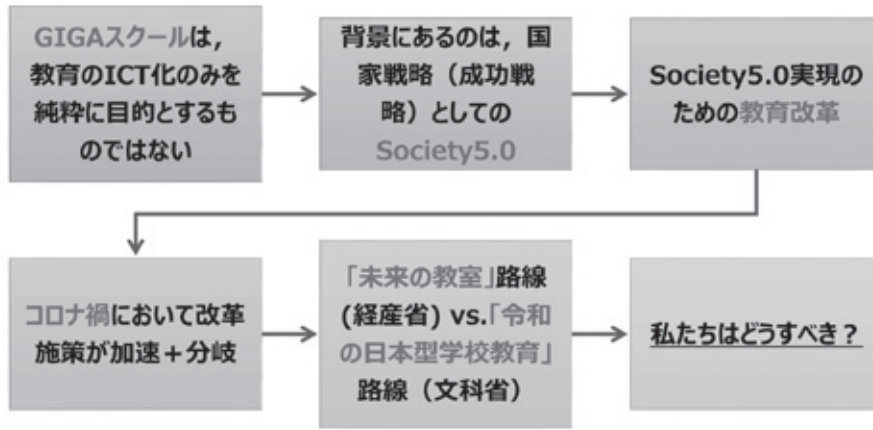
連は、そうなった方が当然経済活動は盛んになるし、企業が作ったものは売れるということなのです。

まとめるとSociety5.0は怪しい概念です。経済は成長するかもしれないが、社会課題については無理なものもあり、逆にこれまで以上に格差が拡大する。Society5.0型のICTとかを使いこなせる人と、十分使えない人が出てくる。使いこなせる人はどんどん富んでいき、使いこなせない人はどんどん不利になっていく。あるいはICT機器を使いこなせないと、使えないあなたが悪いみたいない自己責任とされてしまう。ですからSociety5.0は、バラ色の経済発展と社会課題解決が両立する社会などではなく、ウルトラ格差社会だしウルトラ自己責任社会かもしれないのです。今、教育はいついつ Society5.0に向けて作り変えられようとしているのです。

II 国家戦略としての Society5.0

何が出発点なのか。文科省はある時期から教育の情報化を進めてきました。起点は臨教審のときからですが、2010年には情報化に関する手引きが手直しされ、教育の情報化の3つの側面、情報活用能力を育てる情報教育、各教科教育におけるICT活用、そして先生方の校務の情報化が追求されました。その延長上でSociety5.0なのかというと、そこは違います。そうした筋とは基本的に切れたところで、Society5.0がやってきます。

転換点は2016年4月です。17年3月に小・中の学習指導要領告示ですから、ちょうど新学習指導要領の議論をしている頃です。そういう頃に科学技術について第5期科学技術基本計画が策定され、その時にSociety5.0という概念が初めて登場しました。誰が、この概念を提唱したのかもわかっていて、経団連の当時の会長・中西宏明さんです。この方がイン



タビューではつきりと答えている。ドイツの Industry4.0、第4次産業革命は有名で、日本でも使っていました。それを下敷きにしつつ新味を出したい。かつ社会の全領域に広がる政策にしたいというところで、中西さんは Society5.0 を提唱し、この基本計画に位置づいたわけです。ただし、この時点では科学技術基本計画なので、産業政策というか科学技術政策として張りついている感じですね。

しかしここを手がかりに日本経団連は、この概念を政府に対して猛烈に売り込みにかかる。2016年4月には経団連は早速、サブタイトルに『Society5.0』の進化による経済社会の革新』を掲げた提言を出しています。

16年4月に基本計画策定されたばかりで、その同じ月に提言を出す。最初から用意してあった。その後もいろいろと売り込みをはかり、政府に対して働きかけの17年6月の『未来投資戦略2017』です。

ちょうど小・中学校の学習指導要領ができて3か月後、高校はまだできないときです。この時に、未来投資戦略に Society5.0 という言葉が入り、かつ、それはアベノミクスと融合して成長戦略に位置づけられた。国家戦略です。しかも、この『未来投資戦略2017』の中では、早くも Society5.0 型の社会を実現するた

めには教育や人材育成の役割が大きい。そこが大事だというのが書き込まれました。だから教育政策の方針はここで決まったのです。小・中の指導要領を告示したその直後に、それは違う方針決定がなされている。文科省はどうしようもなく、この1年後くらいには Society5.0 に向けた教育政策を作っていきます。そういう流れなので、出発点からして、不景気であえいでいた経済界の要求なのです。出どころは、教育政策を立案するところではないところにありました。でも教育として、国家戦略である Society5.0 に向けた人材育成には取り組まざるをえないというところから、今回の事態が起きてきたと考えると一番わかりやすいと思います。

それでは、公教育の何が変わるのでしょうか。産業界のための人材育成、プラス巨大な市場を提供することが目指されました。産業界のための人材育成という話は、以前からありましたし継続してきました。だから、新学習指導要領では小学生からプログラミング思考を学ばすし、グローバル人材が大事だと言われると英語教育の強化を図らなくては、4技能を入れた入試改革が目論まれたのです。その意味で産業界向けの人材育成だけだった従来と一緒です。Society5.0 の新しさは、公教育を市場として開放するということを明けて透けに宣言し、その方向に持つて行くこととしていくことです。公教育は企業からすると巨大な市場です。そこに企業が教育サービスや機器などを売って儲かるようにする。その筋道をつけようとしたと考えると、非常に分かりやすいはずですね。

だからこそ、GIGAスクールの1人1台端末なのです。端末は出発点であって、次にはプログラムだったり学習ツールだったりします。プラットフォームを売ることも含めて、利用料とか、そういうことが発生するようになる。要するに、基本的には税金にたかって儲けようという、資本主義としても

非常にお粗末で情けない、相当に末期症状的な構図なのです。現在、日本には小学校2万校、中学校1万校、高校5千校あって、大学が780ある。そこにすべてICT機器や教育サービス・プログラムを行き渡らせるとすれば、大変大きな市場です。それを狙わないわけがない。それがSociety5.0の本質なのだということをご本心に考えなくてはいけない。

III Society5.0は、教育をどう変えようとするのか？

新学習指導要領までは、国家主義（道徳・愛国心・政府見解）と新自由主義でした。その場合の新自由主義は、まだ人材育成まででした。この両輪を上手に組み立てていたのが新学習指導要領です。もちろんこの路線は、教育基本法改悪のときから引かれていて、あの時に両方の要素がちゃんと入れこまれた。それを着実に少しずつ政策化してきて、最後は新学習指導要領でまとめたという感じだったのだと思います。

しかしSociety5.0は新学習指導要領と比較すれば明らかに偏っています。国家主義の方は完全に影が薄くなり何も言われない。Society5.0に関わって、国がとか、道徳がとか、政府見解がなどは誰も言いません。その代わり新自由主義の方が膨れた。学習指導要領段階ではなかったものとして学習の個別化と、教育の市場化も出てきた。学習の個別化は、モノを売ろうと思ったらまず個別化だということなのでしょう。個別最適化だと1人1台の端末が必要になるし、一人ひとりに即した学習プログラムを準備することになる。集団での一斉学習を前提にしてICTを入れると電子黒板とかになるので、それよりも個別化という発想なのだと思います。もっと言えば、AIDRILなどでの個別最適化がすすめば教師の数は減らせるし学校の数も減らせる。効率的になる。

Society5.0における教育は公教育だけで進めるわけではな

いのです。民間教育産業が、むしろ主要な担い手になるという前提で考えています。教育産業を管轄してきたのは、文科省ではなくて経産省です。そこが本当はおかしかったのかもしれない。教育基本法には「あらゆる場所、あらゆる機会における教育」とあるのだから、本当は学習塾とか予備校の教育についても一定の形で文科省が質保証するといったことがあり得たはずですが。しかし、そこは戦後一貫してやってこなかった。そこに目を付けたのが経産省です。教育産業はその後市場規模を拡大して何兆円産業と成長してきたので、自分たちのもとに置こうと考えたのです。文科省と経産省のこうした違いによって、現在は経産省の中に教育産業室という部署がある。その経産省が、Society5.0に向けた教育改革とか教育改変ということで走り出し、文科省はその動きをキャッチしながら、何とか追隨していくやり方で18年6月と19年6月の同じ日に、2つの省庁が報告書を発表したのです。同じ日にしたのは偶然ではなく、互いに事前に連絡し合って、決めたわけです。実は総務省も学校のネットワークの環境整備関係とか、1人1台の端末も含めて自治体と組んで動いているから三つ巴みたいなどころがありますが、教育の中身にまで口を出しているのは、経産省と文科省です。

では経産省は何を考えたか。教育産業室という部屋のもとに「未来の教室」とEdtech研究会を立ち上げて、これまで二度にわたる提言を出してきています。

教育についても教育とテクノロジーを融合させることで新しいイノベーションが起こる。そして「未来の教室」は、学校の教室が最新鋭の機器を揃えることではなくて、社会全体が教室になるので学校はいらぬという話なのです。すでに実証事業も始めている。教科学習についてはICTとAIDRILをやらせれば、先生がいなくても個別に個々の子どもた

ちが端末を目の前にして勉強していく。そうすると通常の一斉授業で授業をやるよりも早く終わるといふ。そんなはずはない。できる子は、早く終わる子もいるでしょうが、最初からそんなのやる気にならない子はたくさんいるわけだし、分からない子もいるはずですが、経産省はそこは見えていない。教科学習が早く終わった分の時間は探求的な学習にすればいい。「協働の学び」にすればいいという話です。

では探求なら何でもいいのかという話ではなくて、基本的にはそれはSTEAM教育です。理科とテクノロジー（技術）とエンジニアリング（工学）と、ちよつと文系的なアート、デザインとかの要素と数学を組み合わせて課題解決的に学ぶという。飛行機はなぜ飛ぶのかとか、宇宙はどうできているのかとか。基本的にはテクノロジーでもって解決しような問題・問いを出して、それをいろんな理科とか数学とか化学、物理とかを動員しながら文系的な要素も入れて課題解決的に学びましょうというものです。まさにSociety5.0そっくりです。Society5.0の社会課題解決というのは、テクノロジー・技術が解決してくれるものについては課題解決できるといふ話です。だけど貧困とか格差は学習できない。あるいはジェンダー不平等はできない。そのようなものは全部無視という話に当然ならざるを得ない。そういう教育をして行く。

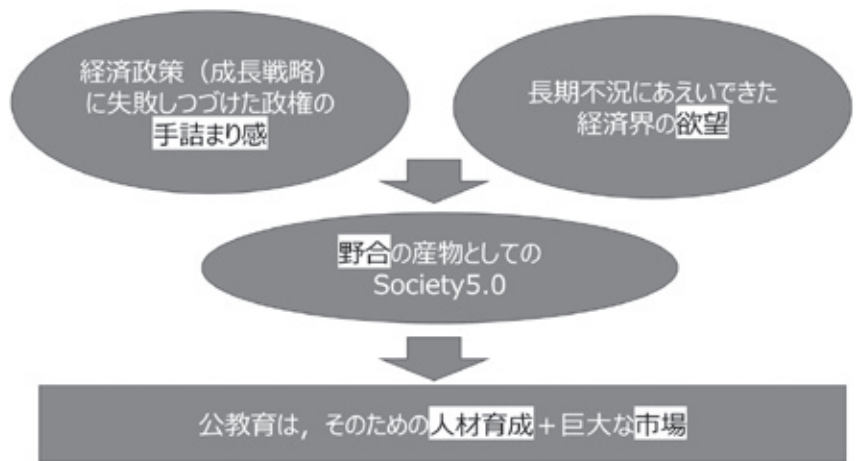
教科はAIDRILをやるわけだから家庭でも図書館でもできる。探究的な学習のSTEAM教育は企業とタイアップしてやるのが前提です。さっきの飛行機はなぜ飛ぶか？ みたいなことは航空業界とかがやって、企業の場合に行つて子どもたちが学んだ方がよっぽど機器も揃っているし、やり易いという話になってくる。そうすると学校でやらなくていいよねという話になるわけです。経産省の人たちは、学校でやっている公教育と民間教育、民間企業が提供していく教育は、基

本的にフラットで対等なものだと思つていふ。いや、正直に言えば民間が作る方が優秀と思つていふ。民間企業が作る教育の方が優秀だから、そちらが公教育を駆逐していくのだと思つていふ。そうすればダメな公教育は廃れていき、民間企業の教育の方がどんどん広がつていくはずだと考えていふわけです。そうなる、もう完全に社会全体が教室になるから、どこで学んでも大丈夫という話なのです。

Society5.0の社会になれば、学習者が自分の学びをデザインするという。そんなこと小学生ができるわけがない。大人の自立的な学習者の話です。中学生だつて全部ができるわけがない。高校生だつてという話なのに、そういうことを平気で言つていふ。でも響きはいいわけで、従来型の学校の形、学力とか学年とか教科とか授業時数で縛るみたいなことはなくなつていく。だから学校概念は薄れていく。

同じことを1年後にも言つていふ。キーワードは学びの自立化・個別最適化だしSTEAM化です。そのための制度基盤も充実するみたいな話になつていく。さらに言えば、実証事業のモデル校は、実際の公教育の学校と組んで行つていふ。民間企業と組んで企業発の教材を学校で使つてもらふことを普通にやつていふ。STEAMライブラリ、STEAM教育をするためには教材が必要なので、その開発も企業にやらせる。個別学習計画も立てる。個別最適化ですから、学びは一人ひとりによつて違ふのだから個別学習計画も必要ですというわけです。最後に教員研修です。教師にも変わつてもらふ。今までみたいな教師では務まらないと、民間企業が教師研修のプログラムつくつていふ。大体が民間企業で働けという話です。

それに対して文科省は、経産省とそっくりなことしか言つていふ。2018年6月の文書「Society5.0に向けた人材育成」



要するに文系理系ちゃんと混ぜてやらないとSTEAM教育みたいな思考はできない。だから従来型の分断は駄目だという話を出してきている。経産省とそっくりなのです。

だからSociety5.0時代の学校においては、個別最適化だから「一斉一律授業の学校」ではなく、「個人の進度や能力、関心に応じた学び」になっていく。同一学年集団の学習ではなく、異年齢異学年集団での協働学習になってくる。教室での学習ではなく「大学、研究機関」もあるが、「企業」と明記している。企業も含めた場を利用したプログラムになっていくとしています。

1年経っても文科省は同じことしか言いません。先端技術、

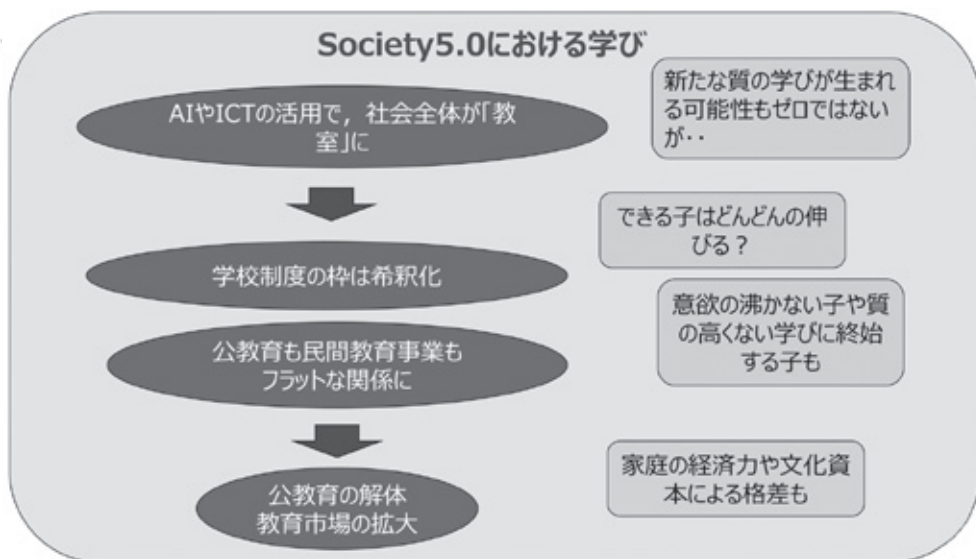
の、今後の教育改革としてめざす方向をみると(Ⅰ)「公正に最適化された学び」と、経産省の個別最適化された学びと一緒に。AIドリルでやっていくみたいな話です。(Ⅱ)「基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力……」と、なぜか数学的思考力が指導要領よりもランクが上がっている。学習指導要領は、基盤的な学力に値するのは言語能力と情報活用能力の2つのはずで数学的思考力ではない。だが、なぜかその順序を変えている。(Ⅲ)「文理分断からの脱却」というのは、STEAM教育です。

テクノロジーとビックデータをかけ合わせて何ができるかというAIドリルです。学習記録がビックデータとして出てくれば、AIが適切に子どもたちに個別の学びの順序に即したものを提供する。結局、何を実現するかというと「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」です。修飾語が増えただけ。2019年6月まで文科省はこんな状態だったのです。

こういうSociety5.0の学びは、ICTによって新しい質の学びを生む可能性が皆無であるとは言いませんが、大方の場合、それはやせ細った学力という感じになるし、同時に全然伸びない子も出てくるでしょう。そして家庭の経済力や民間資本の格差のようなものがそのまま反映してしまう。他方で、そのプロセスの中で公教育の公共性がどんどん薄れていく。結局Society5.0型の教育、人材育成がところどころとしているのは、ごく一部の起業家のようなマインドをもってSociety5.0を担って引張っていくエリート層です。だけど大勢は最低限の消費者として、そういうものを使えるようになるというリテラシーを備えた普通の人です。でも、その消費者としてのリテラシーさえ備えられない子どもたち、若者たちも絶対いる。そうした人たちはアンダークラスということになると思う。全員が上まで行くなんてことは想定していません。だから学習者が自らの学びをデザインするみたいなことも平気で言うわけです。

IV 教育政策はどう動いたか？

以上はSociety5.0に向けた教育改革の、あくまで政策構想です。では実際に、教育政策はどう動こうとしたのかをみていきます。一番早かったのは、2018年に教育再生実行会議が再始動してSociety5.0に向けて教育をどうするかという



議論をし始めました。そうこうしているうちに中教審も発足して、新しい課題として「新しい時代の初等中等教育の在り方」が諮問されました。そして教育再生実行会議の方が、早めに第11次提言を出します。これが2019年5月です。この流れの延長上にあるのが、その年の12月のGIGAスクール構想なのです。だからGIGAスクール構想は、総合経済対策という景気対策でもあったのですが、教育的に理屈をつける際には、この流れのなかでSociety5.0型の教育がバックにあつたわけです。

教育再生実行会議の第11次提言は、文章の中に「新学習指導要領」と何度も出てきます。「新学習指導要領」において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育」といった感じですが、データサイエンスは高校の必修の「情報I」を指しています。あるいは「教育については、全ての児童生徒に基盤的学力」を習得させるとか、それなりに学習指導要領を気にしていることがわかります。しかし、他方で初等中等教育段階ではSTEAM教育の推進を打ち出した提言も出てくる。人材活用を含めて産学連携が大事だとか、産学

連携でSTEAM教育のライブラリーをつくるとかです。「民間企業等との連携・協働が非常に重要」といった言葉も出てきます。簡単に言ってしまうと、新学習指導要領を意識しつつも基本的には経産省の報告書の路線に乗っているのが、この提言です。

その後、2019年12月にGIGAスクールが出ます。GIGAスクール構想のなかで一カ所、文科省がちよつとだけあがいているところがあります。「一斉学習」と書いています。要するに、文科省としては、さすがに20年度から新学習指導要領の全面実施において一斉学習なしというわけにはいかないということ、一斉学習の場面と個別学習の場面と協働学習、その3つでそれぞれICTを使えば子どもたちの学びが深まるという言い方してきたのです。経産省の路線で言えば、一斉学習というのは存在しない。個別最適化された教科の学びをしているか、STEAM教育をやっているかの場面しかない。教科的な内容を一斉授業でしようという発想はない。だから文科省は、さすがにこのあたりから、経産省べつたりではなく、少し自立した方向を打ち出しているかと思いはじめたのかもしれないということです。

V コロナ禍以降の動き

そういうときにコロナのため長期休校になりました。そしてその後の命運を左右するような大きな動きが出てきたわけですね。端的に言うとコロナ以前は、経産省と文科省はほぼ重なっていた。個別最適化というタームにしてもSTEAM教育にしても共有していた。しかし、コロナが起きることで両者は重なりつつも違う方向に動いた。経産省は学校休校を大チャンスと捉えた。ビジネスチャンス、ビックチャンスが到来したのだから、この機会に自分たちが考えてきたSociety5.0型の

オンライン教育や学習システムを売り込んでいこう。その際には民間教育企業にどんどん活躍してもらおうと考えた。急進派の経産省は、より加速して Society5.0 型教育を進めようという方向に向かった。だから個別最適化とか STEAM 化というコンセプトには変化がないわけです。

それに対し文科省は、学校の長期休校から再開のプロセスの中で、分散登校や時間差登校など、あの時期に学校が国民の中で再評価された。学校の存在意義の大きさに多くの親も子どもも市民も、みんなが気づいた。しかも、学校は単に学習を保障するだけの場所ではなく、子どもたちが社会性を身につけたり自治的な力を身につけたりできる場でもあり、子どもにとって安心安全の場所で、食事だって家に居たら厳しい子には給食があるなど福祉的な機能の一部も担っていた。そうした学校の意義を多くの人たちが認識し、学校が始まってくれてよかったと思った。それが、小学校だけではありましたが35人の少人数学級を実現させた原動力にもなりました。

そのところを文科省は見ている、国民的レベルで学校が再評価されるのならば、経産省のやり方に追従して学校を解体させてしまうような方向性からの転換を図ろうとし、この時点で、文科省は経産省とは路線を変えて穏健派に移ったのです。ただし穏健派ではありませんが Society5.0 型の教育改変をやらねえと言っているわけではない。そこは国家戦略なので従う。けれども、少なくとも学校を壊さないで、それを追求していくというポジションへと舵を切ったわけです。

なぜ文科省はそういう動きに出たのか。学校を再評価した世論という背景はありますが、それだけではない。まずは、対経産省を意識した文科省の権益というか省益がある。学校をスリムにし解体して行ったら文科省は縮むだけなのです。文科省予算の半分は教育の人件費です。国家負担で人件費3分の

1を出しているのです。それと、国立学校、国立大学の運営費が予算のほとんどを占めているので、もし学校や教職員をスリム化して行ったら文科省自体が萎んでいく。だから、ここは守るぞということが一つある。しかも、経産省はエリート養成にしか関心がない。将来の経済社会を担ってくれる層が育てばいいと思っている。しかし文科省はそうはいかず、すべての子どもをどうしていくかという発想に立つ。さらに言えば、文科省の路線転換の背後には、ある種の国家主義派というか日本会議派といった人たちの存在が透けて見える。経産省の路線で走りすぎて学校が解体されたら、道徳はどこで教えるのだという話になる。そういう複雑な力関係の中で文科省なりの路線転換が起きたということでしょう。

では、急進派の経産省は、どんな動きに出たのか。学校を休校にした瞬間に「学びを止めない」というスローガンに打って出ました。「学びを止めない未来の教室」と自分たちの事業の名前を冠して何をしようかと言うと、民間教育産業の教材や教育サービスを無料で使ってくださいというキャンペーンをした。民間企業には「これはビックチャンスだから期間限定で無料提供しろ」と説得し無料にさせた。コロナ禍の間だけ無料で使えるとホームページで宣伝をした。民間企業の教材を使えば、学校が休校でもこうやって学べますよと打ち出したわけです。こういう状況を背景に、やっぱり Society5.0 型の教育には未来があるなと人々が思ってくれる、それが何よりのねらいでした。

さらにそうした売り込みだけではなくて、自分たちも補助金を使って民間が作っている教育プログラムや教育サービスを使わせてあげようとした。「EdTech 導入補助金事業」はよくできた仕組みになっていて、企業が学校と組んで、うちの企業のこのプログラムを何々市の小中学校全部と一緒にやりま

すというような申請をする。そうして経産省がオーケーを出すすと、向こう3年間は経産省のお金で学校は無料で、その企業の教育プログラム、教育サービスを使える。学校からしたら無料で使えるわけだから、跳びつく可能性は高いわけです。企業からしたら学校からはお金を徴収できないけど、経産省の補助金が下りるので、それでペイが合うという話です。つまりはSocial5.0型の教育プログラム、サービスを広げようという話ですが、これは当たった。結局69件の企業からの申請が採択されて、その企業のサービスを享受することになる学校が4300校になった。4300というのは日本中の学校の12%です。2020年度だけで日本の学校の1割が、どこかの企業のプログラムを使った教育をしているという状態が生まれた。しかも3年間無料です。

そこにGIGAスクールです。もともとは2023年までに端末を配ると言っていたが、補正予算で増額されたので2020年度中にはほぼ配り終えることになった。さらに2020年度版GIGAスクールの一番の違いはどこかというところ、家庭でのオンライン学習を位置づけたことにあります。要するに、また学校が休校にならないとも限らないのだから、その時にオンライン学習ができるように家庭での通信環境整備の支援をするということ。簡単に言うとWi-Fiルーターを配る。でも、このことは本当はとても大きな問題です。まさに公教育の原則論にかかわります。家庭でのオンライン学習を授業と見做すようなことになれば、公教育は学校でやらなくてもいいという点に道を開くことになる。

菅内閣がデジタル庁をつくりましたが、初代デジタル改革大臣が9月に「自宅（遠隔）学習した分も授業時数に含まれる」という発言をしている。これは公教育の原則からしたらあり得ない話です。授業時数にしたら何でもありになって

しまう。学校でなく全部家庭でやっておいってください、でもよくなってしまう。これに対して萩生田文科大臣は即座に反応して、それはあり得ないと言っている。しかし、こういうのは規制緩和を求める側と防衛する側との力関係なので、はたして今後はどうなるのかという話なのです。文科省も完全に押し戻せるかというところではなく、学校が休校するといった非常時限定では認めざるを得ないとなっていく。だけど非常時ならオンラインでの家庭の授業も授業時数に扱っていいのなら、次の一步は非常時限定が外れるかもしれない。あるいは特例校をつくり、その学校ではオーケーにするかもしれない。そういう意味で、やはり一步二歩と外堀を埋められてきているわけです。

VI 文科省の転回〜「令和の日本型学校教育」

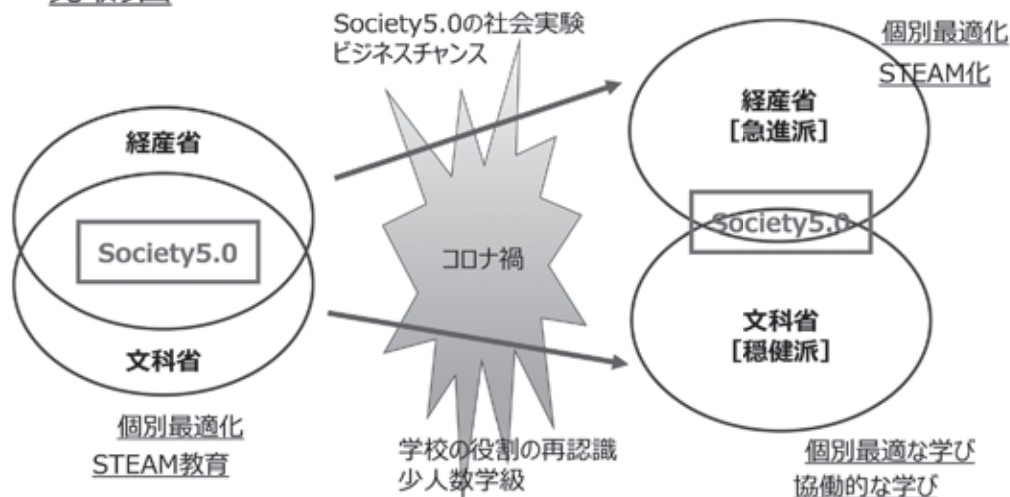
文科省からしたら全方位を囲まれているような感じだと思います。でも何とか対抗しなければということで2021年1月「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」という中教審の答申を出しました。

この答申の構成は、総論は「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両方が必要で、一体的に実現すべきとあって、各論には幼児教育、義務教育、高校教育、特別支援教育が並び、さらにテーマ別の特論としてICT活用と学校の施設・運営、教師が並んでいます。初等中等教育の全体を包括的に扱いつつ、でも中心テーマはICTと学びに絞ってきたという感じですね。

では文科省の方針転換はどこに示されているのか。「個別最適な学び」と言うと「個別最適化」と変わらないのではないかと思われるでしょうが、説明を読むとずいぶん違うのです。簡単に言うと「個別最適な学び」は、従来で言えば「個



見取り図



に応じた指導」と言ってきたものです。従来の「個に応じた指導」は指導する教師側の目線で言ったわけですが、それを生徒側の目線で言えば「個別最適な学び」なんですよというわけですね。何が言いたいのかというと、個別最適な学びはAIDRILではありません。個別最適化はAIDRILを想起させたわけですが、文科省としては、それでは新学習指導要領ともバツティンぐしすぎる。だから従来から一斉学習とかの中でも「個に応じた指導」をやっていたように、一斉授業でも「個別最適な学び」ですよと言うことで、これまでの学校教育との連続性を担保したわけです。しかも、そうやって連続性を担保したうえで「個別最適な学び」だけでは孤立した学びになるかもしれないから、「協働的な学び」も必要だと言う。だから経産省の路線とは違う。しかもSTEAM教育とは言わない。「協働的な学び」です。今度の答申でSTEAM教育という言葉が出るのは主として高校のところですよ。高校以上ではどうやらSTEAM教育をやらざるを得ないと思っ

ているのですが、全体の総論ではそんな言い方はしないで、幅広く「協働的な学び」と出してきてきた。

とはいえ、今の状況下での答申ですので、「令和の日本型学校教育」の中ではICT活用は大前提ですし、Society 5.0型の教育に背を向けるわけでは当然ありません。この点もしっかりと書かれています。そうしたICTに対応できるために、教師もこういうふうに変わってもらわなくてはいけないという話にもなります。それが、この後の中教審が今、発足しますが、テーマを教師改革、教師教育にしている理由です。

この答申をどう読むかについては、「日本型学校教育」と言って明治以降の学校教育はすべてすばらしかったと平板に書いてもいます。けれども、そこに戻るわけではない。Society 5.0を入れる日本型の学校教育なのです。穏健的で漸進的な改変をしていき、その時に一番大事なのは学校のスリム化や解体だけはなんとしても防ぐということです。そこが一番の眼目であり、経産省との違いになるわけです。

VII GIGAスクールとSociety 5.0型教育の問題点

最後にまとめます。GIGAスクールやSociety 5.0型の教育の何が問題なのでしょう。どうしたら子どもが主人公の教育を私たちの側でつくっていけるのでしょうか。

GIGAスクールとは結局何だったのでしょうか。環境整備、たけをやるニューtralなものではなかった。Society 5.0型教育を実現していくための強力なツールです。2020年度に端末を配った。今年度には配ったんだから使いなさいと、当然言われる。何に使うのというときに、民間企業はいろんなサービスや教材を作り、無料で提供する枠ができてきています。どんどん外堀を埋められている。端末を配備したら次は活用を強要すること、さらにその次の段階はコンテンツの強要、これがすばらしいから使いましょうみたいなになっていくことが危惧されます。

文科省関連の記事では、この秋くらいに端末をどういうふう
に活用しているかの全国調査をやりたいと書いてありました。
もしこの手の調査を本格的に悉皆でやり出したら大変なこと
になります。みんなで活用競争をさせられて、とにかく使う
ということになってしまふ。すごく危険なところですよ。

もちろんICT教育やICTの活用をどう考えるかは、じつ
くりと現場で議論すべきことだと思えます。自分たちが実現し
たい教育は何なのか。その時にはICTが本当に必要なのか。
必要だったら、それは積極的に使うべきだし、必要ないんだっ
たらとりあえずそこは置いていくということをゼロベースか
ら議論できなくてはおかしい。だけど今だと、使えと言われて
いるから何に使う？ といった点から話が始まってしま
いかねない。自分たちがこんな教育を実現したいという、そこ
の議論ができなくなるのはすごく怖いことです。

さらに子どもの学びと成長は、こんな教育になって行って、
本当に大丈夫だろうかと思えます。AIドリルでも、試験で
問題が解けるようになる学力だったら身に付くかもしれない。
だけど、それはやせ細った学力で、なぜそうなの？ という
問いがかけられても、そこがわかるようなわかり方ではない。
みんなで教室の授業の中で協働・共同で学習して、だからこそ
培われる学びの豊かさというのがある。いろんな友だちの意
見を聞いたとか、ときには間違えてしまった子がいても、そ
の子の間違えからもみんなが学び合うみたい。そういう空
間の響き合いが全然ないことになってしまふので、どんなに
AIが精巧になって学習データがビッグデータとして集まっ
たとしても、所詮AIにできることはどんな問題を「個別最
適に」出すかでしかない。

こうした学びの貧困というか貧しさをどうするかだけでは
なく、課題解決学習とか協働・共同学習がSTEAM教育、テ

クノロジーに牽引される課題学習みたいなものになってしま
うことも、すごく狭い学習を生み出すことになる。

特別活動というのは、日本の学校教育の誇るべき活動では
ないかと思うのですが、それが経産省の発想には存在してい
ない。経産省は教科学習と探究でSTEAM教育をやれば終
わりですから。だけど本当は、特別活動こそが、いろんな子
どもの成長を保障してきたし、子どもたちの多様な課題意識
が熟成してくる場でもあったと思う。そこがなおざりにされ
てしまふのはすごく問題で、経産省などはある種のエリート
層を育てたいんでしようが、その層だってひ弱になる。人
間的な成長の機会を奪われてしまふ。そこところは本当に
考えなくてはいけない。学びが「自己責任化」することは何
としても避けないと、これまで以上の格差が出てくる。さら
に言うところと公教育自体が破壊されてしまふ。市場化は着実に進
んでいくところになるわけです。

どういうふうに向き合うのかというときに、本当に子ども
を主人公・主役にするような教育を実現するためには、文科
省は今Society5.0に対してカッコ付きの「抵抗」めいたこ
ともしますが、しかし「令和の日本型学校教育」で子どもが
主人公の教育をやるかというよりはやりきれない。「令和
の日本型学校教育」は相当に厄介な代物です。学校解體路線
ではないが、Society5.0を進めていくことを前提にしている。
日本型学校教育という枠には戦前以来の日本の学校教育のあ
る種の問題性が持ち込まれることも十分にあり得る。国家主
義にしても道徳にしても、競争や管理、評価で縛り上げること、
先生方の長時間労働など、そこを放置したままでうまくやれ
るはずはないのです。その意味では本当はこんなものが対抗
軸に見えること自体が変なのです。

そうであれば、私たちは急進か穏健かというのは別として

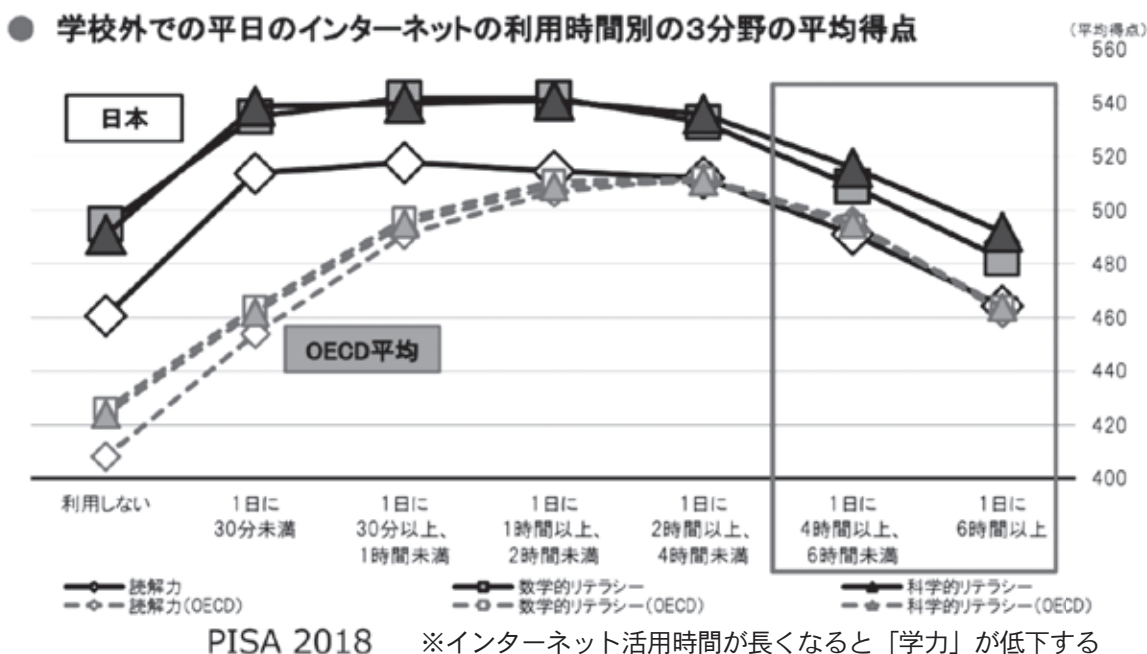
Society5.0の路線、経産省にも文科省にも乗れない。同時に古くさい日本型学校教育でいいかというところ、そこも違う。その3つではないところに私たちの考える学校の姿を見通せるかどうかだと思います。

その際に、コロナ禍で学校が長期休校していたときに学校が再評価された。あの時に見えた学校の本来の役割、学校の像にちゃんとした形を与えていくことをやって行かなくてはいい。あの時に多くの人がこういう学校であってくれたらと期待した学校像とか、あるいは分散登校でやっと通えたときの子どもたちの安心した表情は、その後ぎちぎちの4人になってしまっただけとは違うはず。だから、コロナ禍の長期休校の中で感じたものを実現していくということも、これからの時代の子どもが主役の教育を本当につくるということになるだろうと思う。

ただしその際でも2つの課題があって、一つ目はICTについては、Society5.0型のものとは問題だとしても、ICT自体が悪ではないので、そこはどうするか、ICTとじっくり向き合わなくてはいけない。二つ目はSociety5.0は決して経産省と民間企業だけで踊っているんじゃない。社会の中でも一定の支持基盤がある。昔であれば、それこそ「個に応じた指導」もそうだし、習熟度別学級のような議論は親もいろんな人たちもみんな反発したと思う。でも今は受け入れている。塾をみれば、ほとんどの学習塾が個別指導になっている。単に目的が試験に受かるための学力の獲得だけであれば、確かにSociety5.0型は効率的だったりする部分もある。自分のペースで学べるし、自分に分かるようにしてくれる。そういう感覚や意識とどう向き合うかという課題もあると思う。

※本文資料は講演当日のPower Pointより
(法政大学教授)

〈児美川さんが紹介した資料〉



1996年から法政大学に勤務。2007年よりキャリアデザイン学部教授（現職）。日本教育学会理事、日本キャリアデザイン学会副会長。
著書に、『キャリア教育のウソ』（ちくまプリマ新書）、『夢がふられる社会に希望はあるか』（ベスト新書）など多数。

GIGAスクール問題・・・小学校では

試行錯誤しながらの日々

佐々木 久美

2021年の年明けから、「GIGAスクール」「クロームブック」という言葉が職場に出てきました。出てきた途端に、「アカウントを確認……」「パスワードの設定をお願いします。」

学校に入ってきたと思ったら、私たち教師が使い方もわからないのに、パスワードを設定させるために家庭に持ち帰らせるようにということでした。特に、6年生は中学校でも本格的に導入されるので、スピード感がありました。みんなが何かに追い立てられるように、タイピング練習をさせていました。休み時間に遊ばずにタイピング練習をしている子どもたちの姿を見て、クロームブックに操られてるように見えて恐ろしく思いました。私も年度末の学習のまとめの時期で、テストやプリント、ノートのまとめをしていました。各教科のまとめになると、子どもたちの作業の差も出てきていたので、早く課題が終わった子にタイピング練習をさせていました。子どもたちは目を輝かせてタイピングの練習をしていたのですが、私はやらせておきながら複雑な気持ちでした。

自分のクロームブックということがうれいのか、ことあるごとに、「クロームブックを使っているのですか。」と口にするようになりました。私は、以前研修会で心に残っていたことを思い出しました。「意味調べは、国語辞典が有効である」という内容です。スマホで調べるとスピード感はあるが、頭に残らないという話でした。この話を子どもたちや打ち合わせで話しました。クロームブックの使い方を間違えると大変なことになると思いました。図書室の本での調べ学習はしなくなる……。国語辞典も漢字辞典も社会科の図説も環境関係の本もいらなくなる……。休み時間に友達と遊ばなくなる……。自分で考えることをしなくなる……。

市教委は、「高学年は1日3回はクロームブックに触らせるように」と授業の中でクロームブックをどんどん使うように言ってきていますが、このメッセージには、職場でも首をかしげる人が多いです。

ただ、クロームブックの活用でわかったことがあります。板書を写すのが苦手、書く活動が苦手な子は、意欲的に文字を打ち込んだ

り、音声入力をしたりしていました。このような子にとってはクロームブックも有効な手段になるという発見がありました。

クロームブックが1人1台配付された以上、憂いてばかりもいられなくなりました。何が大切なかを改めて考え、正解が何かはわかりませんが、これから、私たちは失敗を繰り返し、試行錯誤しながら、有効な使い方を探っていくかなければならないと思います。

クロームブックありきの授業ではなく、教材研究をしていく中で、必要と判断したときに使うことが大切です。最後に4月から私が取り組んだ例の一部を紹介します。

○社会で具体的に映像を見せたいときに活用した。

○新聞形式にまとめるときに画像を入れてまとめた。

○授業の事前アンケートなどは結果がそのまま円グラフや棒グラフ化された。

(上杉山通小)



GIGAスクール問題・・・中学校では google for education? education for google?

岩 沢 一 郎

教育の現場が、生徒の実態が、教育を取り巻く環境が、スマホなどの情報端末の普及と進歩が、GIGAスクールに向かって動いているような気がする。

現場が忙しいからだろうか、定期テストは業者に作ってもらえたらいいとか、宿題はAIに作ってもらって採点もAIにしてもらおうのいいかもという話が出る。

本校の今年度の合唱コンクールは音楽の授業で十分に音合わせをすることができなかったが、アイパッドによる個人練習でカバーした。

不登校の生徒もネットを利用した通信制高校であるN校の中等部に入学する生徒も増えつつある。本校ではN校での学習日数を通学日数としてカウントすることになった。

教育を取り巻く環境という点で言えば、コロナによる休校における課題配布、オンライン授業。なかなか実現しない少人数数学級など様々だ。

数学や物理に限って言えば、小学校から大学院レベルまでの授業が日々配信されている。

また、フリーの多言語インターネット百科事典であるウィキペディアは、一つ一つの事項に対する解説が多面的で深くその意味を解説されている。

しかし、だからGIGAスクールなのかというのとは違うような気がする。GIGAスクールというものが、教育の劣化版ではないかと感じてしまうからだ。

コロナの影響で小中学校が休校で授業がストップしている中、大学ではオンラインで講義が行われていて、だから一人一台端末なのだと言われていた。ところが、今も多くの大学では、対面での講義が制限され、オンラインの講義が中心になっていて学生からは不満が噴出し、授業料の返却を求めて訴えている人たちもいる。オンラインを中心とした大学の教育に教育の劣化版、廉価版を感じるからだろう。

小中学校で言えば、課題の作成や採点にしてもAIに任せると、生徒の実態にあった課題を教員が選択して採点によって生徒の実態を把握し、それを授業や新たな課題づくり

に生かした方が、生徒の学習の深まりにつながると思う。また、学級の数が多いから一人ひとりの意見を聞くことができないから一人一台端末だという人がいるが、それも少人数学級であれば、もっと充実した授業ができる。しかし、ICTの活用を否定するわけではない。

30数年前に作られたロゴライターという教育ソフトは数学と教育の論理に従って作られたもので、画面上のキャラクターを動かしながら図形を書き、試行錯誤を繰り返す中で数学とプログラムの考え方を学ぶことができる。NHKで取り上げられたスクラッチはその後継ソフトである。

このようなソフトの活用環境としては、一人一台端末は有効である。わざわざ校内のパソコン室に連れて行かなくても、教室で授業ができるからだ。

ところが、こういった教育者や学者が作った優れた教育用ソフトについては、不思議なことほとんど話題にならない。個別最適化のためのAIドリルというのは、数学や教育の専門性が反映して作られたものなのだろうか。よく話題になるGoogleが作ったアプリは、教育のために作られたというより、教育用に改良したという程度のものだ。

GIGAスクールはgoogle for educationとイコールなのではないかと思ってしまう。いや、education for googleではないか。そうでなければ良いのだが。

(名取一中)

東日本大震災の

学習プラン作り

～風化させないために社会科教育ができること～

宮城歴史教育者協議会 加藤 正伸

(1) はじめに

東日本大震災から10年の歳月が過ぎました。ということは、今年度の小学校4年生は震災後に生まれたことになり、6年生でも当時の記憶があるかどうか分かりません。このような震災未経験または震災の記憶がない子どもたちがこれから増えていくこととなります。

宮城歴教協では早くから「東日本大震災を教材化し、後世に伝えていかなければならない」と考えていました。その中では、「大震災を教材として社会科の授業を実践することとは、宮城の教師の重要な課題である。」「災害問題と日本国憲法という視点での授業が大事である。」という提起がなされていきました。なかなか動き出せないでいたのですが、数年前から「宮城歴教協プラン作り」を開始させました。

(2) これまでの経緯

① まず、プランの基本になる柱を検討しました。話し合いの中で、「プラン作りの大事な視点は災害問題と日本国憲法」「取り上げる内容は、◎被災の実態 ◎災害復旧のため国・県・市町村の行ったこと ◎憲法11条・13条・25条にかかわって安全に生きる権利と災害復旧対策な

ど」ということを確認しました。

② 次に、多くの先生方に実践してもらいたいので、新しく単元を立ち上げるのではなく教科書にある教材を利用することにし、小学校社会科のどの単元で学習できるか、東京書籍の年間指導計画を検討しました。そうすると、4年生の9月教材「自然災害からくらしを守る（10時間扱い）」、5年生の2月教材「自然災害を防ぐ（5時間扱い）」、6年生の5月教材「災害復興の願いを実現する政治（7時間扱い）」〈選択教材〉で学習できることが分かりました。内容を整理すると次のようになりました。

- ・4年～東日本大震災の実態を知る。地域の問題に気付く。
- ・5年～日本で起こった自然災害を知り、防災の取り組みを考える。
- ・6年～日本国憲法を基にして災害復旧・復興を考える。

③ そこでまずは4年生の単元のプラン（指導計画）作りに取り掛かり、現在使われている東京書籍の教科書の該当ページを見てみました。まとめのページには、「自助（自分の身は自分で守る）」「共助（学校や地域で助け合って守る）」「互助（他地域との助け合い）」「公助（市や県、国

などによる助け）」という言葉が出てきました。自助や共助、そして互助というところに重きが置かれ、自分たちのことは自分たちで守れと言われているような感じを受けました。社会科で学習することは「公助のあり方」であると確認しました。

(3) 4年生の震災学習プラン

何度かプランの検討会をもち、その形ができつつありますが、まだ確定したものはありません。ぜひ現場の先生方に実践してもらい、ご意見をいただきながら改良していきたいと思っております。このプランを実践してみたい方は、ご連絡いただければ一緒に授業を考えます。なお今後は、5・6年生のプランそして教科書にはないのですが1～3年生のプランも考えていく計画です。

＜小学校4年生の宮城歴教協 震災学習プラン＞

1 学習の目標

- ①東日本大震災で起こった事実を調べ、その様子や被害の実態を具体的に理解する。
- ②自治体の防災対策や地域の課題を知り、これから安全に生活するためにどうしたらよいかを考える。

2 学習プラン（10時間扱い）

時	ねらい	学習内容	留意点
1	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災の様子や被害の実態を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災について知っていることや聞いていることを発表する。 東日本大震災の時の様子を知る。(写真・映像・作文など) その後の生活の変化を知る。(仮設住宅・引っ越しなど) 	<ul style="list-style-type: none"> できるだけ具体的に震災の様子を知らせたいが、子供たちの心情に配慮する。 大きな地震が起こるとどんなことが起こるのかを確認する。 お家の人や身近な人から、地震の時の体験を聞いてくることを宿題にする。
2	<ul style="list-style-type: none"> 東日本大震災の時に起こったことを、更に調べる。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">東日本大震災で起きたことや被害の様子を調べよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> お家の人や身近な人から聞き取ってきたことを発表する。 お家の人や身近な人から聞き取ってきたことや友達が調べたことをワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 聞き取ってきたことを交流することで、本時の学習に意欲を持たせる。 聞き取りができなかった子は、友達の聞いてきたことをまとめさせる。 ワークシートの中には、調べた事実だけではなく自分が感じたことも記入させ、自分事としてとらえさせる。
3	<ul style="list-style-type: none"> 震災遺構について知り、見学の意欲を持つ。または 体験者を紹介し、質問を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 近くにある震災遺構の概要を知る。 震災遺構について、さらに知りたいことや見てきたいことなどを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域にある震災慰霊碑や被災学校遺構等について簡単な説明をし、見学の意欲を持たせる。(例)・荒浜小 ・門脇小 ・大川小 ・中浜小 ・気仙沼向洋高
4 5	<ul style="list-style-type: none"> 震災遺構を見学し、地震や津波の被害について具体的に知る。 または 体験者のお話を聞き、質問する。 	(例) <ul style="list-style-type: none"> 震災遺構(荒浜小学校)を見学する。 ①校舎の様子 ②展示されているもの ③ビデオ ④屋上からの風景 	<ul style="list-style-type: none"> 語り部の方などにお話を聞きながら見学する。 気付いたことをワークシートに記入しながら見学させる。 見学したもや見学している様子を写真などに記録し、まとめる時に使う。
6	<ul style="list-style-type: none"> 見学してきたことをまとめる。 または 体験者のお話をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 震災遺構を見学してきて分かったことや感じたことを交流する。 特に大事なことを取り上げて、全体で考える。 震災遺構を見学して分かったことをワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 見学して分かったことなどを交流することで、気づきを全体で確認する。 もし、その場に自分がいたらどんなことができたかも考えさせる。 ワークシートは廊下などに貼り出し、学年全体や他学年に広める。
7	<ul style="list-style-type: none"> 今後の地震や津波に対して心配なことをまとめ、自治体の役割を知る。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">今後の地震や津波に対して心配なことを確かめよう。</div> <ul style="list-style-type: none"> 聞き取ってきたことや自分で考えたことを発表し合う。 「自分たちでできること」「自分たちでできないこと(自治体にしてほしいこと)」を分ける。 直接自治体の担当者に話を聞くことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 事前にお家の人や身近な人から、今後の地震や津波に対して心配に思っていることを聞き取らせておく。 防災における自治体の役割を知らせる。 自治体の担当者の話を聞いてみようという意欲を持たせる。
8 9	<ul style="list-style-type: none"> 自治体の担当者の話を聞き、自治体の対策を知るとともに、自分たちの気づきを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自治体の担当者の話を聞き、質問する。 ①自治体の現在の取り組み ②自治体の災害発生後の取り組み 前時に考えた心配や疑問を担当者に伝え考えを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> 担当者には子どもたちの心配や疑問を事前に伝えて打ち合わせをし、話が一方的にならないように注意する。 主権者として、安全な生活をするために行政に要求することの大切さをこの学習を通して実感させたい。
10	<ul style="list-style-type: none"> 「地震や津波に強いまち」にするにはどうしたらよいか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自治体の担当者の話を振り返る。 学習して分かったことや考えたことをもとにして、課題についてワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自治体の担当者の話を確認しながら、自分の考えをまとめる。

日々、笑顔で

土井 浩 孝

「おはようございます。」

私に向けられた元気な子どもの声。

「おはようございます。」

私も笑顔で、子どもにあいさつを返します。

いつもの教室、元気な子どもたち、あつちでは何やら外で何かをして遊ぼうかと話し合う子どももいます。何気ない朝の教室の風景ですが、その子どもの顔にはマスクがあり、冬でも常時窓を開け、寒い風を教室に入れるような日々。コロナ禍の中での学校生活が始まってから、2年目に入り、マスクも換気も、消毒も「非日常」では、なくなってきました。

2020年2月28日、休校要請を受け、多くの小中学校があわただしく臨時休校の準備をした日。

当時の私は5年生を担当しており、最高学年に進級するにあたり、伝統として受け継がれてきた和太鼓の練習も形が見え始め、6年生を送る会の準備も紆余曲折がありながらも進め、「あとは3月を全力で頑張るだけ」と、この子どもたちと過ごせるラストの1か月を楽しみにして

いました。

打ち合わせ前の職員室で、私は（せめて、あと1週間……、1日だけでいいから、この子どもたちと過ごさせてほしい。）と願いながら、市の教育委員会や学校長の判断を待っていました。

結果として、休校が決まり、肩を落としてながら教室にいきました。

「先生。大丈夫だね。」「まだ休みにはならないよね。」という子どもからの質問に、「校長先生からのお話があるから、しっかりと聞こうね。」と、つくり笑顔でしか答えられないあの状況は、歯がゆい以外の何もありませんでした。校長先生から、臨時休校が決まったことを放送で聞くと、泣いてしまう子もいました。私自身も（子どもたちの命を守るため）と、頭ではわかっているのに涙が止まらなかったのを覚えています。

それから、再度の臨時休校期間を経て、学校が再開されました。

子どもたちもどつてきた学校は、見えない感染源への対応として、「離れます。話しません。触れ合いません。」と、いつもとは真逆の声掛けをしなくてはいけない苦しさや、やらせてあげたい活動をさせてあげられないもどかしさがありました。

振り返ると、コロナ禍のあの1年は、朝の検温チェックや教室の消毒作業、学校行事の見直しに伴う計画の立案・変更など、増えた仕事ややるべきことが多くありました。しかし、子どもたちのいない閑散とした雰囲気ではなく、子

読者の声

コロナ禍で考えたことは、現場の教員の多忙化を心配しています。私が現職の頃、O-157、インフルエンザ大流行のときを思い出します。O-157のときは、調理実習の食材を保管しておくこと、インフルエンザ流行のときは、児童下校後職員一斉に消毒作業をしたことがありました。現在のコロナ感染防止の手立ては、多岐に渡り、先生方の配慮や仕事が増え、よく頑張っているなあと考えています。くれぐれも身体を大事になさって欲しいものです。（小出信也）

まず字が大きいこと大変うれしい。老眼故に大変よく見えます。次に子どもが中心になっている編集は教育にたずさわる人達に希望の光を与えていけることでしょう。コロナ禍と子どもの権利条約31条を企画されておりますが、これは日本中の方々も世界の問題も共にカバーしていると思われ感謝致しております。見出しも本文も読みやすくなっていると思われ。（齋藤健）

「センターつうしん」、毎回興味深く読んでいます。紙面が新しくなってから、とても読みやすくなりましたね。

私は保育園を退職し、土いじりを楽しむ毎日ですが、代替保育士として、人手が足りない時など、保育園の手伝いに行っています。そして、そのつど子ども達から新たな発見をし、伸びる力のすばらしさを実感すると同時に、大人の責任についても考えさせられます。

今回の増山先生の論文にはとても共感しました。また、その他の記事もコロナ禍の中でがんばっている人達の姿が浮かびあがり良かったです。

（町田文子）

どもたちのために活動を見直し、子どもたちと同じ空間で何かができるうれしさがありません。学校は、子どもが中心であると改めて感じた1年となりました。

そして今年、コロナ禍の2年目の学校生活が始まりました。私は、毎日ニコニコと自分のクラスに行きます（マスクで顔はみえませんが……）。毎日笑顔でいられるのは、昨年を乗り越えたという経験だけでなく、東日本大震災での経験を思い出したことが大きな要因です。

地震と津波で大切な家族や家を失った方、これからの生活の見通しが持てない状況……

校庭には仮設住宅があり、周囲にはまだ津波の爪痕がしっかりと残っていました。あの時も十分すぎるほどの非日常の学校生活でした。

その中でも、笑顔を忘れず学校に協力してくれる保護者の方々、子どものために避難所だった校舎をピカピカにしてくれた地域の方々、給食がパンと野菜ジュースだけでも「ありがたうだね。」と言って笑顔で食べる子どもたち、子どもたちが将来を楽しみにできるようなものがないかといつも考えていた先輩方……

震災の中でも、私が頑張ることができたのは、そのような人の温かさを日々感じることができたからです。そのことを思い出し、できる限り子どもたちと笑顔で接しようと、シンプルに自分の原点にもどることができました。

結びに、コロナ・ウイルス感染症という見えないものへの不安は、大きいものです。コロナ禍の中で、できないことややりにくいことはた



くさんあります。

でも、その中でも、マスクをしていても笑顔で子どもたちにあいさつをし、フィジカルディスタンスを意識しながら楽しく対話することは、きつと子どもたちに人の温かさを伝えることにつながるのではないのでしょうか。

「昔、コロナって流行したよね。」

「ああ。名前忘れちゃったけど、何だか先生はいつも笑っていて、面白かったよね。」

「うーん。あの時何したっけなあ。」

……。

と、成人した子どもたちが笑って話している、そんな未来につながることを願って、日々笑顔で子どもたちと私は考えています。

どんな状況であれ、次の時代を担う子どもたちが少しでも幸せな子ども時代を過ごせるように、できる限りの努力を重ねていきたいと思います。

(赤井小)

歴史と科学に学ばない国は、再び同じような過ちを犯すものだとしみじみ感じる今日このごろです。

先日、『被曝インフォデミック』（西尾正道著・寿郎社刊）という本を読みました。自らの臨床研究を基礎に、真実を世に問う真つ当な医師が、日本にはまだいるのだと嬉しくなりました。専門家とか有識者とか言われる方々もフェイクサイエンスで書かれた教科書を盲信するのではなく、科学的思考でICRP（国際放射線防護委員会）の催眠術から解き放たれてほしい！と西尾医師は本書で熱く語っています。

コロナ禍の中で東京五輪を開催する事態となり、国民の生活は大変な危機を迎えています。センターつうしんを読みながら、次世代にこれ以上、負の遺産を残してはいけないと感じました。（小野寺修子）

「子育て、孫育て奮闘記」の阿部真弓さん、ふるさと宮城から応援しています。双子の遊ちゃん・葉ちゃんは、日々新たな姿を見せてくれていることでしょう。慣れたとはいえ、毎日マスク着けて日中を過ごすだけでも、子どもも先生も息苦しさには耐えているにちがいません。大阪の気候・風土・人情・方言・教育環境の違いに加え、コロナ禍で双子ちゃんの育児サポーターをなさっている真弓さんの大変さは想像に余りあります。

私は定年退職した元教員で、夫も同業でした。子どもが乳児の頃、日中は赴任地の浜のおばちゃん宅で預かっていただき、安心でした。夜泣きされると私は寝不足のまま、ボロ雑巾のような体でとぼとぼ出勤したものです。ある時、見かねた夫は、「今晚は俺がみるから、あんたは隣の部屋で休まい。」と言ってくれ、泣いてぐずる息子をおぶい、ねんねんばんてんを着て、敷地続きの小学校の校庭を、すっかり寝つくまでお尻とんとんしながら歩いて寝せてくれたのでした。

何もできないけれど、遠くから「元気でいてね。」と祈ってます。（矢目萬里）

子育て、孫育て奮闘記

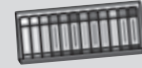
遊ちゃん、葉ちゃん便り ②



阿部 真弓



阿部真弓さんは、宮城で小学校教員を勤め、大塩小で定年退職後、大阪で暮らしている娘さんの子育てを支えるために大阪に移住。障がいを持った孫育ての中で、宮城と大阪の教育環境の違いや教育の在り方などを考えます。



コロナ禍、夏休み突入！

7月21日、夏休みが始まった。今年もコロナの再拡大により、緊急事態宣言下の夏休みとなった。子どもの居場所づくり事業（小学校の余裕教室開放、指導員が支援）が始まったが、すぐに中止となった。

夏休み中は、午前中は葉ちゃんにつきっきりで課題のサポート。障害があっても普通学級に所属しているので、同じように課題が出る。さらに葉ちゃん用の宿題もあり、盛りだくさん。毎日が課題との格闘である。私は、現職時代の夏休みの課題の出し方を、今更ながら大反省。一方、遊ちゃんは課題を適当に済ませ、友達と外で遊びまわっている。炎天下の中で、外で遊ぶので、コロナ感染よりも熱中症を心配するほどである。おかげで真つ黒に日焼け。まるで昭和の子どものようだ。

小中一貫校「彩都の丘学園」

孫たちが通う彩都の丘学園は、2011年、箕面市内で2校目（大阪府内でも2校目）となる施設一体型の小中一貫校として開校。開校当時、児童生徒数71名だったが、本年度は1503名教職員数109名、超マンモス校である。学年は、1年生から9年生。前期（1〜4年生）、中期（5〜7年生）、後期（8、9年生）に分かれる。5年生から制服着用、段階的教科担任制による専門学習が行われる。

孫たちが入学した2年前は、コロナもなく入学式は普通に行われた。驚いたのは、1クラスしかない9年生が、受付や準備後片付けの仕事をしていた。小中一貫校ならではの良さだと感じた。192名の新1年生であったが、私も入学式に参列できた。ただ、入場と退場の時にしか孫たちの姿が見られなかったことは残念であった。

特別支援学級がない！

就学前、娘夫婦は葉ちゃんをどこの小学校に入れるかを悩

んだ。聴覚支援学校を薦められたが、家から遠い。公共交通機関を利用すると1時間40分、車なら1時間だが、朝のラッシュ時はどれだけかかるかわからない。また、生まれてからずっと遊ちゃんの後を追ってきた葉ちゃんが順応できるのか心配であった。娘夫婦は悩んだ末、地域の中で育てたいという希望を優先。就学先は彩都の丘学園に決めた。

ところが、箕面市では30年前から、「共に学び、共に育つ」支援教育が実施され、①「可能な限り地域の学校に通うこと」、②「通常の学級で生活すること」という方針の下、特別支援学級が設置されていなかった。難聴のため、言葉が獲得できなかった葉ちゃんが、果たして学校生活に適応できるのだろうか。学校側も言葉がわからない葉ちゃんが入学してくるのを心配していたに違いない。入学してすぐ、担当の先生に、具合が悪いときの様子を質問されたことから推察できた。

小学校生活が始まった。ランドセルを背負って、うれしそうにしている2人を近くの6年生が迎えに来てくれた。集場所まで行き、集団登校。担任はみんなと同じ先生、主担当の先生を中心に学習支援員2、3人が交互にサポート。1日の学習内容は個別ノートを通して報告される。学校での出来事や持ち物などは、連絡帳や個別ノートで連絡されるが、わからないことも多い。そんなときは遊ちゃんに聞けば大体はわかった。双子でよかったなと思った。

近所には、登校を渋る1年生の子を見かけたが、遊ちゃんも葉ちゃんも毎日元気に登校。ある日、遊ちゃんが「葉ちゃんも学校で人気者なんだよ」と言った。まさかと思ったが、そういえば、お迎えに行くといつも葉ちゃんの隣には先生と友だちがいた。そして、「指文字はこれでいいの」とよく聞いてきた。子ども達は、葉ちゃんと会話がしたいということが伝わってきた。きつと休み時間に先生を介してこのような時間があるのだろうか。まさに「共に学び、共に育つ」支援教育が行われていると感じた。葉ちゃんは「彩都の丘学園」でよかったと思った瞬間であった。

（大阪府箕面市在住）

今から10数年前、高教組の役員として現場を離れ、書記次長を1年、書記長を3年務めた。第一次安倍政権の頃だ。安倍首相(当時)は、小泉構造改革をまるごと引き継いで、新自由主義的な政策を推し進めるとともに、教育基本法改定(改悪)をぶち上げた。当然、教職員組合はこぞってこれに大反対。この2006年は、専従役員だけでなく、現場の先生方にも呼び掛けて何度も国会前に直接足を運び、デモをしたり集会をしたり座り込みをしたりと様々な運動に参加した。

そんな頃の話だ。国会では、いよいよ「教育基本法改正案」の参考人質疑が衆議院

文部科学委員会で行われるという情勢になった。こんな理不尽なことが許されてたまるかと、全国の教職員組合をはじめ、良心的な教師達の怒り

はまさに沸点に達しつつあった。宮城高教組はまだ全教には加盟しておらず独立教組だったが、教組共闘として、全教が呼び掛けた国会前座り込み行動に参加した。私は、宮城高教組書記長として、都内のビジネスホテルをねぐらにし、ほぼ1週間にわたり毎日国会前に通い続けることになった。そんな中で、日比谷公園を会場として全国・各界からの代表が次々と集結した大集会が企画され、私も宮城から駆けつけた仲間達とともに「宮城高教組」の青いのぼり旗を肩に掲げて日比谷野

外音楽堂の階段を下りていった。

そのときだ。後ろから「八反田くん」と呼び止める女性の声があった。こんなところで自分の名前を呼ぶのは誰だろう。ましてやこの歳になって「くん」付けで呼ぶ人は現みやぎ教育文化研究センター所長くらいしか私には思いつかない。おそろおそろ振り返ると、めちゃくちゃ懐かしい顔がそこにあった。すぐに分かった。なんと、中学3年生の頃の副担任の木原秀子先生ではないか。お会いするのは中学校卒業以来だから30年ぶりのこと。木

わたしの出会った先生 33

2006年の再会

八反田 史彦



い体育の教師が、異様に生意気な生徒たちと向き合って、一緒に笑ったり泣いたり、体全体で向き合ってくれた記憶はきれいな事ではなくてまぎれもない事実だ。都教組町田支部の役員として、熱血教師としてだけではなく教職員組合の闘士として活躍していた担任の斉藤先生の背中に学んでいたのは、私たち生徒だけでなく木原先生も同じだったのではないかと今では思っている。まさに、そのときの斉藤御大の導きこそが、日比谷音楽堂での再会を30年越しにプロデュースしたのではないかと国会前の喧噪の中で感慨にふけっている自分がいた。

原先生が都教組から全教の専従として女性部事務局長の任にあることは書類上では知っていた。でも、まさかこんなところで会うとは。びっくりよりもうれしかった。お互い、同じような業界にいるので向こうも書類上では私の存在は認識していたようだった。

木原先生は、私が中学に入学した年に大卒新任として赴任した体育の教師だ。3年間私たちの学年担当を持ち上がり、私が3年生の時の担任である同じ体育の斉藤環先生のもとで副担任をしていた。若くてえらく生きのい

それ以来、全教の会議などで上京した際に地元仲間とともに木原先生を囲んで食事に行くことも多くなっていた。その都度語り合うのは、当然中学3年生として過ごしたあの1年間の様々な出来事のこと。60年を過ぎた自らの人生の中で、15歳の自分たちが駆け抜けた365日は、単なる「60分の1」というにはあまりにも濃すぎる1年だ。子どもから青年になりつつある思春期という時期が、一人の人間の人生においてどれだけ大事な時間だったのかという意識は、教師としての自分にとってきわめて大切なものだ。その思いこそが、「子どもの今の生活こそ大切に」という教師としての自分の姿勢の立脚点の一つになっている。

(宮城高教組書記長)

“現場感覚”と “おせっかい”を武器に

みやぎ教育相談センター所長 瀬成田 実

退職して変わったこと

2021年3月、38年間の教員生活を終えた。3月までと4月以降は大きく3つ変わった。

1つ目は朝活をするようになったことだ。勤務開始が遅くなったので朝にゆつたりできる。まずは、朝ドラを見るようになったこと。「おかえりモネ」は私の初任地気仙沼が舞台だけに面白い。散歩もするようになった。通勤途中にM公園で15分のウォーキング。仕事は電話相談が中心。なので運動不足解消のために、小鳥のさえずりを聞きながら老木の間を歩く。気分がすがすがしい。最近はこちらに加えてバットの素振りを開始。腹周りが太くなったので、腰にひねりを加えれば少しは贅肉が取れるだろうと思いついたのだ。が、初日、庭にあったアヒルのオブジェの首にバットが命中し、さっそく壊してしまい、その上、2日後にぎっくり腰に。相変わらず注意力散漫な私……。

2つ目は、夢を見るようになったことか。ほぼ毎晩見る。妻からは「現場では忙しかったでしょう。あなたは「現場ではなくなったんだね」と揶揄される。人間、暇になると夢を見るのだろうか。決して暇になったわけではないのだが、間違いなく余裕はできた。

3つ目は、新聞や本を読むようになったこと。新聞は斜め読みだが毎日3紙を読む。本は図書館から借りて読むようになった。なので、頭の中の情報が増え、すぐ忘れるが……。

そんな私である。

センターの仕事を始めてみて

勉強不足を痛感させられている。

4月以来、ネット等で調べ、ノートに書き留めた専門用語は次のようなものだ。ADHD、ASD、LD、ID。境界性パーソナリティ障害、適応障害、HSC、マイクロアグレッション。うつ病、統合失調症。オープンダイアログ、アドボカシー、ホームスクール。LGBTQ(SOGI)。

これらは、相談者から教えてもらった。相談員の中で話題になったり、読んだ新聞、書籍の中に出てきたりした。気になる語句・用語である。相談者を理解したり、これからの教育のあり方を考える時、役に立つだろうと思われる知識だ。あまりに多すぎて手に負えないが、少しずつ頭の中に貯まってきた。

相談を通し、子どもの言動から透ける家庭での親子・夫婦関係、学校に攻撃的な親が抱えるストレス、子どもや親との対応に神経をすり減らして心身を病む教師などの実態が見えてくる。

学齢期を超えた相談者の中には、学校や教師への不満を持ち続けている。大人もいる。そんな相談を受けていると、自分も、子どもに寄り添い、励ます、よき教師であつたのだろうかと不安が走る。

私の強みは、体の中にまだ残っている現場感覚と、38年やり通せたという少しの自負、そして生来の「おせっかい」性分。それらを武器にして、日々相談者の悩みを聞き、勉強しながら、寄り添っ

ていければと思っている。

もう一つ。教育機会確保法をどう具現化すればよいか。これは重要な課題の一つだ。学校に行かない、行けない子どもたちの居場所や学習環境をどうするか。その条件整備のために、フリースクールや適応指導センターなどと当センターが連携できないか、模索を始めた。

相談センターの活用を

「あちこち電話しましたが、適切なアドバイスをもらえなかつたので、ネットでこちらを見つけてお電話しました」という人がいる。何年も継続して相談センターを頼っている人もいる。当センターが最後の「頼みの綱」になっている人も少なくないようだ。

みなさん、相談センターに一度お電話ください。敷居はまったく高くありません。※現在、コロナ対応のため15時まで
に時間短縮中(土曜は休み)。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき10時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。



おすすめ映画

伊藤真弓



『海辺の彼女たち』

2020年

映画「海辺の彼女たち」の監督は、藤元明緒さん。監督が実際に技能実習生から受け取ったSOSメールをきっかけに着想されたという。

主人公はベトナムから来た3人の女性たち、アン、ニユー、フォン。彼女たちが、3か月働いた職場から脱走を図ることから始まる。たどり着いたのは、過疎の雪深い港町。不法就労という不安の中で働き始める3人。

そんな中、フォンが体調を崩してしまふ。病院に行くが、診察を断られる。身分証がないからだ。彼女は秘密を打ち明ける。妊娠しているかもしれない。家に送金するはずのお金で闇の業者から身分証を手に入れる。一人で病院を探し回り、診察を受けるのだが……。



映画の終わり、彼女の無言の決意に胸を打たれて、しばし立ち上がれない。この映画を見て、「差別」への怒りを抑えられなかった。「外国人」という差別、「女性」という差別。私もその差別と闘ってきた一人である。

世界第4位の移民大国の日本。この10年間で激増している。外国人労働者が、いかに劣悪な状況に置かれているかはこの映画が語っている。

名古屋入管施設で、スリランカ人のウイシユマさんが亡くなった。収容施設の動画を見た妹が涙ながらに語った。「姉は犬のような扱いをされていた」と。

映画が現実をあぶり出し、未来を暗示する。フォンの未来は、私たちの未来。私たちの行動が問われている。

(多賀城小)



読書のすすめ(第5回)

春日 辰夫

○『収容所から来た遺書』 辺見じゅん 著 文藝春秋社 1989年

過日、NHKスペシャル「追悼 立花隆」で、画家香月康男がシベリア抑留生活を最後まで描きつづけたわけを知りたくてシベリアの地に行く立花の姿を映した。それで『収容所から来た遺書』を取り上げることにした。

この書には著者辺見による「あとがき」がつく。次はその書き出しである。

ハバロフスクの強制収容所で昭和29年8月25日に死去した山本幡男氏の、第7通目にあたる遺書が山本家に届けられたのは、昭和62年の夏の日のことだった。山本氏が世を去ってから実に33年目にあたる。

届けたのは、横浜市保土ヶ谷に住む日下鈴夫氏、アムール句会の「梅城」氏である。

この短い文にだけでも、「収容所で戦後8年目の8月に亡くなる」「第7通目にあたる遺書」「(遺書が)届けられたのは昭和62年の夏」……と、通常では理解し難い時間や出来事が書かれる。山本たちは極寒のシベリア収容所内でアムール句会をもつことで結ばれ支え合った。「戦争とは……」はもちろんだが、人間にとっての「文化」のもつ力をも深く考えさせられた本であった。



○『私にとっての20世紀』 加藤周一 著 岩波書店 2000年

前述の立花は“知の巨人”と呼ばれた。加藤周一を同様に“知の巨人”とよんで異論が出るだろうか。加藤は1919年に生まれ、2009年に亡くなっている。まさに20世紀を語る貴重な方になる。

加藤は、「私にとっての20世紀は、私の経験に関して言えば、テクノロジーの進歩による環境の変化が印象的なことのひとつだが、20世紀を生きて強く感じたのはやはり戦争。~~20世紀の終わりに来て必ずしも楽天的ではない。何故ならば、戦争に関しては日本政府が平和主義に積極的であったとは、必ずしも言えない。むしろ、方向転換してまた戦争の方向に向かうのではないかという心配の方が大きい」と述べている。

この8月16日、「首相に歴史観はあるか」との朝日新聞社説は、その中で、「首相は官房長官当時、沖縄の苦難の道のりへの理解を求める翁長雄志知事に『私は戦後生まれで、歴史を持ち出されても困る』と述べた」と書いていた。わが国の首相が「20世紀の歴史を知らない」と平気で口にしたことに唾然となった。21世紀も5分の1が過ぎた。何も変わらない。20世紀を知ることは21世紀を変えることだ。首相と同様では変わらない。それが加藤の私たちへの期待だと読んだ。若い人たちにぜひがんばって読んでほしい。

※これらの本はセンターにあります。お読みにになりたい方には貸し出します。



おすすめBOOK

「書く・読む」文化の変化の先は?!

久保 健 (センター運営委員)

この春、定年(70歳)を迎えた。東京の大学に15年「出稼ぎ」する中で研究室とアパートに蓄積した本が半端でない。仙台の家の私が見えるスペースは一部屋なので、廃屋同然の旧居を急遽片づけて運び込んだ。それだけではない。実家に亡父が残した膨大な本がある。大半が推理小説と時代小説だが、父と同じ趣味で捨てられない性格の私は、帰る度に整理して運んでいる。これらは本棚には収まらず、哲学からコミックまで山積みになっている。

もう一つ、研究会のニュースや研究年報が電子化された。この傾向は拡がって行くだろうが、まだ液晶画面を熟読することになじめず、紙に打ち出している。学生時代、ガリ版↓ボールペン原紙↓謄写ファックス……というピラづくりの変化を体験した。卒論も修論も手書きだった。ワープロは悪筆の私にとつて資料づくりの救いの神になった。しかし……自分の原稿の書き方が、まず書いてから推敲するスタイルに変わった。以前、中国の西安で書の刻まれた石柱が林立する「碑林」を見学したことが思い出される。構想を練り、ガリ版にあるいは手書きで「刻む」ように文字を選んで綴る文化が無くなった先に、何が待っているのだろうか?

子どもの風景「作品について」……千葉 早苗 (宮城作文の会)

この作品は文集に載せて学級のみならず読み合い、笑った作品です。明るくユーモアあふれる清志さんが、「ほんとマジでぶっちゃげて抜けてよかったって。」と言うから、さらにみんなの笑いがこみ上げます。そこから子どもたちの歯が抜けた、欠けたという話が止まらない、止まらない……。友達の作品をきっかけに自分の経験を話したくなってしまうということが学級文集の読み合いにはよくあります。その子の体と心とくぐり抜けて出てきた自分の言葉や表現であることがとても大切であると考えています。

再度の感染拡大、GIGAスクール、子どもたちはもちろん私たち教師も不安や悩みを抱えて学校生活を送っています。だからこそ、子どもたちとの毎日の生活を大切に、目の前の子どもたちを丸ごと受け止めたいと強く思うのです。

センターの動き

7月 東京オリンピック2020 コロナ禍で進行開催

3日 児美川孝一郎教育講演会 会場参加 31名 ユーチューブ視聴当日89名 その後460回再生(9月7日現在)

9日 第5回事務局会議

10日 「みやぎ教育のつどい」第2回実行委員会

11日 道徳と教育を考える会 江戸期の教育(貞原益軒)

13日 こくご講座世話人会

19日 ゼミナールStudy「アランの教育論」(11名)

22日 「教育」を読む会 7月号(9名) 第4回研究部会 GIGAスクールアンケートについて

8月 第5波 緊急事態宣言

6日 こくご講座2021(千葉建夫さん)(34名)

16日 『人新世の資本論』読書会(宮教大)

19日 全国教育のつどい全体会

23日 ゼミナールStudy「クルプスカヤの教育論」(12名)

27日 第6回事務局会議

28日 「教育」を読む会 8月号(9名) 第5回研究部会 GIGAスクールアンケート案検討

31日 大震災：高校生の犠牲者調査 高教組との打合せ

9月 コロナ緊急事態宣言の中、学校再開

3日 大震災：高校生の犠牲者調査 県審査会への意見書提出

12日 「道徳と教育を考える会」中止

18日 「教育」を読む会 9月号 第6回研究部会 GIGAスクールアンケート決定

24日 第7回事務局会議 つうしん104

号発送作業予定
25日 「みやぎ教育のつどい」第3回実行委員会
27日 ゼミナールStudy「クルプスカヤの教育論」

編集後記

8月20日、ユニセフは「子どもの気候危機報告書」を発表。世界の子どもの半数約10億人の子どもたちが気候変動の極めてリスクが高い国で暮らしていると指摘。気候変動による洪水、台風、熱波、水不足、病気などの危険。水や衛生、保健・医療、教育などのサービスが不十分でさらに悪化。温室効果ガスの排出削減のために緊急に行動を起こさなければ、最も苦しみ続けるのは子どもたちで、「気候危機は子どもの権利の危機である」と警告した。

一方、8月30日、文科省はコロナ禍で強行された今年の全国学力調査の結果公表。県教委も県と仙台市の結果を速報として発表。小・中学校も全国との乖離マイナス2〜5点。文科省が競争をおおるとして公表していない全国順位をわざわざ公表。「今後の対応として、市町村とも課題意識を共有し学力向上を推進」。夏休み明け、ある市教委は早速「学力向上緊急対策会議」を開催、各学校の管理職を招集した。

今、学校に必要な緊急対策は何か? 子どもの命を守るためにコロナ対応に追われ悩む学校・教職員、保護者。その上に全ての子どもたちにタブレット端末配布が教職員と保護者を悩ませている。経産省・文科省の「GIGAスクール構想」。その狙いは? 学校の状況は? 本号は、学校で進む急激な改革「GIGAスクール」の問題を考えます。皆さんのご意見・ご感想を受取る払いはがきなどでぜひお寄せください。

(達)

